

正しい人の快樂：プラトン『国家』第九卷 における快樂論の意味

奥田, 和夫

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

48

(開始ページ / Start Page)

17

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2003-03-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002905>

正しい人の快樂

——プラトン『国家』第九卷における快樂論の意味——

なぜならその人は、
諸君を幸せであると思われるようにするが、
わたしは幸せであるようにしているのだから。

「ソクラテスの弁明」36D

奥田和夫

はじめに

『国家』全篇の主題は「正義とは何か、そして正しい人と不正な人のどちらが有利であり幸福であるのか」という問題であった。この問題のうち後者の問いに答える準備として、「悪しき不完全国家とそれに対応する人間」の類型論が第八卷から第九卷にかけて論じられる（534A-576B）。これをうけて第九卷の残余の部分では（576B-592B）、最も正しい人間（統治者としての愛知者）と最も不正な人間（僭主独裁制の人間または独裁僭主その人）とが選びだされ、両者の優劣を下す判定がなされる。

この判定は全体として次の三つの証明（*apodeixis* 580C9）にもとづく。

第一証明（576B-580C IX.4-6）：国制と人間（魂）との対応に着目しながら徳と悪徳、幸不幸の観点からなされる証明

第二証明（580C-583A IX.7-8）：魂の三部分それぞれに固有の欲望と快樂があり、これらを代表する三種類の人間の主張が有する信頼性（真実性）による証明

第三証明（583B-588A IX.9-11）：真実で純粋な快樂と苦痛からの解放である不純な快樂の区別による証明

これらの証明のうち、とりわけ研究者たちの不評を買っているのは第三証明すなわち快樂の真偽論⁽¹⁾である⁽²⁾。小論の課題はこの第三証明を中心問題として、第

九巻の快樂論が『国家』全篇においてもつ意味をできるかぎり明らかにすることにある。考察は次の手順によってなされる。

1. 第一証明と第二・第三証明との間に断絶はあるのか
2. 第二・第三証明において語られる快樂の分類
3. 快樂の真偽論解釈

結 語

1. 第一証明と第二・第三証明との間に断絶はあるのか

第一証明と第二・第三証明との間にある種の断絶を認める傾向が研究者たちに見られる。たとえばGuthrieは、優劣判定は第一証明で終了しており、登場人物ソクラテスは第二・第三証明で「正しい人の生は不正の人の生よりも快い」ということを不必要に論じている、これは第二巻のグラウコン、アデイマントスによる「正義擁護の要求」には含まれていなかったことだと主張した⁽³⁾。またKrautは、第二・第三証明のこのような議論は「正しい人の生は最も幸福である」という第一証明の議論とは区別され、むしろこれを補完しているにすぎない（正しい生は結果として快くもある）、『国家』の基本問題への解答はあくまで第一論証にある、と主張し、第二・第三証明を『国家』の‘the fundamental argument’から除外する⁽⁴⁾。Butlerはこうした傾向に対して反論し、三つの論証のすべては同一の結論すなわち「正しい人の生は最も幸福である」ということの証明として提出されていると主張する⁽⁵⁾。この問題は些細なことのように見える。いずれにしてもプラトンは、アイデアを観照する哲学者の生が最も幸福であると言っているのだ、と。しかしこの問題は『国家』全篇の主題にプラトンはどのように答えたのか、またその答えのなかで第九巻の快樂論はどのように位置づけられるのか、その見きわめにやはり深刻な影響を及ぼす問題である。第九巻の快樂論を直接論じる前にこの問題を一瞥しておきたい。Butlerの議論は次のとおりである。

まず、第一証明を終えたソクラテスはその直後に、

「以上がわれわれにとって、一つの証明となるだろう。つぎに、この第二番目の証明を見てくれたまえ。それが何ほどかの意味があるものと思えるかど

うか」(580C9-D1)

と語るが、この言葉のなかの第一証明の証明内容が「正しい人の生は不正の人の生より幸福である」ということを指示していることに問題はない。であるならば、第二証明もまた同じその結論の証明であるのが当然である。さらに、第二証明を終えたソクラテスはその直後に、

「以上の二点にわたって、以上のようにしてつづけて二度、正義の人は不正の人を打ち負かしたことになるだろう。つぎに三度目はオリュピアの競技にならって、・・・これは最も重要で最も決定的な勝負において〔不正な人が〕投げ倒されたことになるだろう」(583B1-7)

と語る。この第三証明も第一・第二証明と同じ結論を証明していると考えるのが自然である(以上、Butlerの言う the Natural reading)。

しかし、第二・第三証明が実際に「正しい人の生は不正の人の生よりも快い」ということを論じているのはたしかである。Butlerもそれを認めた上で、なおかつこれらの二つの証明は「正しい人の生はもっとも幸福である」ということを示すように意図されている、と考える。その理由はどのようなものだろうか。

Butlerは主要な反駁対象をKrautに絞り、次のように論じる。登場人物ソクラテスは第二巻において「正義は不正よりも大きな快樂を提供する」ということの証明を明確に約束したわけではない。そのことはKrautが言うとおりでである。しかしだからといって快樂が「国家」の基本的問題に含まれないというKrautの主張は帰結しない。Krautの主張が成立するためには、第一証明が独裁僭主の苦痛に満ちた生(578A,579B-C,and esp.579D9-E6)に深く関係している事実を無視しなければならないし、また第三証明によって「最も重要で最も決定的な勝負において〔不正な人は〕投げ倒されたことになるだろう」という言明の重要性を最小限に評価しなければならない⁽⁶⁾。さらに、正しい人の生を推奨するために「正義は不正よりも大きな快樂を提供する」というテシスは擁護されるべきである、ということプラトンは第二巻で示唆すらしていない、というKrautの議論は明らかに誤りである。そのテシスをそのような仕方プラトンが論じていないのはたしかであるが、プラトンは、より大きな快樂(またはより少ない不快)と正しい人の生との関連を示唆している。正義を厭い不正を是

認する、ソクラテスの立場とは対局にある一般的傾向を第二巻のアダイマントスは語る。節制・正義は美しいが困難で苦しいもの、放埒や不正は快く醜いとされるのは評判とノモスのうえでだけ、不正なことは正しいことより得になる、悪い奴だが金持ちや、力のある者は幸せ者と呼ばれる……。 (364A) Krautはこのテキストを無視している。かくして利益性、幸福、そして快樂の三つの要素すべてが『国家』の基本的問題に含まれる。

Butlerの言うthe Natural readingに反論の余地はないと思われる。また快樂の問題が『国家』においてきわめて大きな重要性をもつことも当然である。『国家』におけるソクラテスの論敵トラシマコスの説はいわゆる快樂主義を含意し、第二巻のグラウコンとアダイマントスが語る一般的思潮もトラシマコス説を補足するものであるからである。⁽⁷¹⁾また、Butlerの説明とは別に、登場人物ソクラテスの次の言葉をここで注意しておいてもよからう。第三証明を語りおえた、つまり三つの証明をすべて語りおえた直後の言葉である。

「それでは、もし快樂の点で、善い人・正しい人が悪い人・不正の人に対してこれほどまでに勝利しているとすれば、生活の気品と美しさと徳の点では、[前者の後者に対する] その勝利はさらに計りしれぬほど大きなものとなるのではなからうか?」「ゼウスに誓ってまことに計りしれぬほど大きなものでしょう」(IX.588A7-11)

このごく短いやりとりのなかから善い人・正しい人における快樂と徳の関係を断定することはできないが、三つの証明の連続性や統一性を予想させる。

しかしButlerの解釈を全面的に受け入れることは、すなわち、第二・第三証明の快樂論が「正しい人の生は最も幸福である」ということを示すように意図されていると解釈することは、プラトンは「ある人の生は、それが快いがゆえに、幸福である」というように一種の快樂主義の立場に立って論じていることを承認することになるのではないか?

Butlerは彼の主張が正しければ「プラトンはまったく真剣に快樂主義を受け入れている」と言う。Krautらが第一証明と第二・第三証明とを分離しようとするのは、このようにしてプラトンを快樂主義者に仕立てることを避けようとする意味をもつ。事実Butlerが言うように、『国家』(505B-C)や『ゴルギアス』(495E-499C)におけるプラトンは「快樂にも悪いものがある」と主張している

のだから快樂主義を斥けているように見える。Butlerは論を締めくくるにあたって、ここでのプラトンの快樂主義はいわゆる「身体的快樂主義」(somatic hedonism)ではなく、『プロタゴラス』においてソクラテスに帰されることがある快樂主義の「the richer versionのようなもの」であると推測する。Butlerのこの推測の当否はともかく、彼が主張するthe Natural readingを認めたくえで、われわれは次にプラトンが語る快樂の諸相と快樂の純不純の問題を考察しなければならない。その考察は、プラトンの立場をButlerのように一種の快樂主義と呼ぶかどうかという問題にも手掛かりを与えてくれるだろう。

2. 第二・第三証明において語られる快樂の分類

これら二つの証明において快樂に関する原則的な議論が三箇所であたえられている。これらの議論は観点や力点のおき方に違いがあり、これによる混乱を避けるために、まず各々の議論を整理し快樂を分類しておく。

A <魂の三区分別に即した分類>それぞれに固有の快樂があること
(580D-581B)

- (1) 理知的部分：「学びを愛するもの」「知を愛するもの」
- (2) 氣概的部分：「勝利を愛するもの」「名譽を愛するもの」
- (3) 欲望的部分：「金錢を愛するもの」「利得を愛するもの」

B <純粋な快樂と不純な快樂の分類> (583B-584C)

- (I) 不純な快樂 (苦痛からの解放)：身体をとおして魂にとどく快樂 (身体的快樂) のほとんど大多数のもの、そして予想的快樂が含まれる。
- (II) 純粋な快樂 (苦痛を前提しない)：匂いによる快樂

不純の快樂 (または苦痛) とは、プラトンの譬えを使えば次のようになる。すなわち、快苦の対立を<上><下>とし、その中間に快でも苦でもない<中>の静止状態を想定する。不純の快樂を得る人は実は<中>から<上>へと登ることを知らない。そのような人が<下>に位置する苦から快でも苦でもない<中>へと向かうその動きを快と思い、反対にその快が<中>で静止すると苦の状態にあると思い込む。こうした苦からの解放を快と思ったり、快の停止が苦であると思うことによって、見かけ (現われ phantasma) だけの純粹では

ない、つまり対立物との混合である不純の快苦が現出する。純粹の快樂はいまの譬えを用いれば<中>から<上>へと向かう動きであるから、この分類でプラトンが、純不純の快樂を區別する規準を唯一苦痛との併置・苦痛からの解放・または苦痛との混合 (cf.586B7-8) の有無においていることは妥当である。さらにプラトンはここで身体的快樂のほぼ全体を不純の快樂として一括りにまとめている。かりに「純粹」「不純」「身体的」「魂中心」の四項目を使用しそれらの組合せで、形式的に四種類の快樂を想定すると、たとえば、匂いによる快樂は「身体をとおして魂にとどく純粹な快樂」として分類することができ、また予想的快樂は「魂中心の不純な快樂」として分類することができよう。⁽⁶⁾しかし、ここでなされたプラトンの実際の分類はもっと大雑把である。けれども大多数の身体的快樂が不純の快樂として特徴づけられるとすると、魂の少なくともある部分の快樂は純粹な快樂を代表することが予想される。事実、次にみる議論はまさにその点に焦点が定められる。

C <存在と眞実性に与かる程度の違いによる分類：純粹な快樂の領域>

(585A-E;cf.586A-D)

(1) 存在と眞実性に与かる程度が高いものによる快樂：

眞実の考え、知識、ヌース、総じてすべての徳、の種類によって充足される快樂＝純粹な快樂 次の(2)(3)の快樂に比して眞実性・確実性の度合いがはるかに高い快樂

(2) 名誉・勝利・怒りによって充足される快樂＝(3)と同様の不純な快樂

(3) 食物・飲料の種類によって充足される快樂＝生成界にある死すべきものとの関連で生じるものによって充足される快樂＝不純な快樂

この議論はAの分類を土台として使用し、さらにBの分類を重ね合わせることによって純粹な快樂の領域を確定したあと、最後にC(3)の食物等による快樂と対比しながら、「存在と眞実性に与かるものによる快樂」＝C(1)に力点をおく構造となっている。C(1)の純粹な快樂はアイデアを知ることの関わりにおいて説明される。

3. 快樂の真偽論解釈

快樂の真偽判定は困難である。あるいは常識的には不可能である。第三証明における快樂の真偽論が多くの研究者から（誤解をまじえた）不興を買っているなかで、Whiteの議論は興味深い⁹⁾。参考にすべき所見を次にまとめてみよう。

W1：快樂に関するプラトンの考えはイデア論を構成する考え、とりわけ、感覚界における多くの属性の現象・非現象は感覚対象やその観察者が偶然に位置する状況に左右される、という考えと同質のものである。プラトンの考えによると、身体に由来する大多数の快樂が所属するタイプの快樂とは、苦痛、とりわけ身体に補給される食料を奪われたりこれを欲求したりすることにとまなう苦痛への近接やこれらの苦痛との対比によって、その見た目の快さが維持されるタイプの快樂をいう。これに対して、快いという現われが偶然の状況に左右されることがもっともすくない快樂がもっとも純粋な快樂である。(White pp.229-30, note B to 583b-585a)

W2：プラトンのここ 585A-E での意図を正しく理解するために、次のイデア論的見地を想起すべきである。

- (1) 一般に対象は条件付きでのみその属性をもちうるがその条件の一つは時間性・一時性である（ある時点ではFであるが、別の時点ではFでない）。
- (2) 感覚対象がもつ条件付きの属性は程度（degree）を許容しうる。
- (3) 対象Aが対象BよりもFのイデアに近似するとき、AはB「よりも真実にFである」とも、単純にB「よりもFである」とも言われうる。

ここには、快樂の真偽論の文脈で特別な注意を要する考えが含まれている。それは、あるものが属性Fをもつ条件が比較的ゆるければ、そこにどのような条件がふくまれていようとも、それゆえそれはよりFである、という考えである。通常「よりFである」というフレーズを使用するのは、AはBよりたとえより激しくFであるというような

ことを示すためである。[ここにプラトンの議論に対する困難な問題 (=W 4) が生じる。] (White pp.230-1, note B to 585a-e)

W 3 : 585B-Cが明らかにしているように、プラトンの基本的論点は、さまざまな種類の快楽を経験する際に見られる安定性と不安定性、そして快がそこにおいて感じられる対象ないし出来事がもつ安定性と不安定性に関わる。(White p.231, note C to 585a-e)

W 4 : プラトンの議論に対する困難な問題点：快楽が感じられる対象の不安定性によって快楽に不安定さがあたえられる、という考えを認めるとしよう。しかし、①「快楽Aは快楽Bよりも不安定である」という主張から、②「快楽Aは真実度と純粋度に劣る快楽である」という主張へ、そしてさらにそこから③「快楽Aは重要な意味においてむしろ快くはない」という主張へと移行する場合、問題は②の主張に意味されていることが[上のイデア論的見地(1)より]「それはより多くの(たとえば時間的・一時的)条件をもつにすぎない快楽なのだ」ということであるとしても、日常的なものの見方では、そのことによってそのものが「むしろ快くない」(③)ということになるとはかぎらない、ということである。(White pp.231-2, note D to 585a-e)

W 1の説明は正しい。不純な快楽をとらえるプラトンの視点はWhiteがW 1で説明するプラトンの感覚対象一般をとらえる視点と同じである。その視点はまた、Whiteも指摘しているとおり(p.229)、第七巻の「三本の指の比喩」(523C-524A)で語られる問題、すなわち対象は同じもののはずなのに状況に応じて相反する現われを呈するという問題のとらえ方と共通する。そして「快いという現われが偶然の状況に左右されることがもっともすくない快楽」とはイデア論の考え方の上では「<快楽>のイデアをもっとも多く分有している快楽」ということになる。

W 4で言われる困難な問題点とは、②の不純の快楽をイデア論的見地から「多くの欠陥をもつ快楽」なのだと言明しても、その不純とされる快楽が快いことにかわりないではないか、という日常的なものの見方からの反論がなされるということである。プラトンもこの意味においては、つまり「日常的なものの見方において」は当該の快楽がそれを感じている者にとって快くあることを

否定しない。プラトンは、錯覚であろうと何であろうと、それが「そのように現われている」のを「そのように現われていない」などと言っているわけではない。現われは同じでも仮象とそうでないもの（真象？）とを区別しようとする手だてが純不純の考えである。

W3について言うべきは、快樂の「対象」の安定・不安定性といっても、この箇所（585A-E）でこの「対象」に該当するものは、イデア的真實在に関わる種類（genos）と生成消滅するものに関わる種類（gene）との二大別しかなされていらないことには注意すべきだろう。

さてでは、問題の純粹な快樂は具体的にどのように説明されており、快樂の眞偽論は『国家』においてどのような役割をもつのであろうか。もう少し詳しくテキストに即して考えなければならない。

585A-E（第2節(C)1のテキスト箇所）において、純粹の快樂の説明は、まず議論の出発点として身体と魂とが対置され、それぞれの空虚に相当するものとして飢えと渇き、無知（agnoia）と愚かさ（aphrosyne）が挙げられる。そしてこれら二種類の空虚を満たすものが「食物の摂取」と「ヌースの保持」（nounischon 585B7）とである。次に、存在の度合いが低いもの（より少なく存在するもの hetton on）によって満たされるよりも、存在の度合いが高いもの（より多く存在するもの mallon on）によって満たされるほうが眞実の充足であることが確認されたのち、一般に食料の種類（T）と「眞実の考え、知識、ヌース、総じて徳の種類」（N）とのどちらがより多く「純粹の有〔イデア〕に与っている」（katharas ousias metechein 585B12）のかが問われる。

「<つねに不変にして不死なる存在>〔イデア〕と眞理とに関連をもつもの〔N〕、そして<それ自体もそのような性格で、そのような性格のもの〔魂〕のうちに生じるもの>〔N〕のほうが、より多く存在すると君には思えるだろうか。それとも、<片ときも同じ相を保つことなく死すべきものとの関連をもつもの>〔T〕、そして<それ自体もそのような性格で、そのような性格のもの〔身体〕のうちに生じるもの>〔T〕のほうがだろうか」「それはもう、つねに不変なる存在に関連をもつもの〔N〕のほうが、はるかにすぐれています」（585C1-6）

かくして、

「そうすると、自分の本性に適したものによって満たされることが快であるとするならば、より本当の意味で、また、より多く存在するもの〔N〕によって満たされるもの〔魂〕は、より本当の意味で、またより真実の仕方で、〔われわれに〕真実の快樂を樂しませるのだということになる。これに対して、より少なく存在するもの〔T〕に与かるもの〔身体〕は、真実性と確實性のより少ない仕方でも満たされることになろうし、より疑わしく、より真実性の少ない快樂にしか与からないということになるだろう」「まったく必然的に、そういう結論になります」(585D11-E5)

ということになる。身体と食料、魂と知が存在の度合いを異にしながらかつ満たされる関係のなかで、不純な快樂と純粋な快樂を得る。純粋な快樂に即して言うならば、アイデアとの親近性をもつ知識等がおなじくアイデアとの親近性をもつ魂——正確にはこの場合合理的で学びを愛する部分——のうちに生じることによって、アイデアの真実在性に与かる仕方でも真実で純粋な快樂が成立するわけである。

しかし魂(合理的で学びを愛する部分)のなかに知識その他が生ずるという場面を再確認しよう。もともと魂の空虚として無知(agnosia)と愚かさ(aphrosyne)が考えられ、これが満たされた結果が魂における「真実の考え、知識、ヌース、総じて徳の種類」の生成であった。この空虚から生成・充実への転換をプラトンは一言で「ヌースの保持」(noun ischon 585B7)と言っている。「ヌースの保持」はまた「真実の考え、知識、ヌース、総じて徳の種類」が魂の内にあることと同義でもある。そして「ヌースの保持」は正確には魂の合理的で学びを愛する部分においてのみ成り立つ。ということは、魂の空虚すなわち無知と愚かさはヌースなき魂(ヌースなき人またはヌースなきころ・私)のあり方であり生き方である。先の引用文(585D11-E5)の直後に語られる人々のありさま(586A-D: 第2節 C(2)(3)に該当するテキスト)はこれを辛辣に描写したものである。

しかしまたそもそも「ヌースの保持」とは何か。日常語法(noun echein 分別・理解力をもつ; 注意する, 心を向ける)³⁰はともかく、この場合つまり愛知者(哲学者)の場合、哲学的用法すなわち線分の比喩などで語られるもっとも高度な知性の活動(cf. 511D1, 534B5-6)を考えるのが適切であろう³⁰。そしてそ

の際強調すべきことは、線分の比喻によってプラトンが示そうとするのは認識対象のあり方とともに、しかしそれ以上に認識および魂のあり方であるという点である (cf.511D-E,533E-534A)。同様にいま、純粋な快樂がそれによってもたらされるところの魂における「ヌースの保持」もその点を忘れてはならない。純粋な快樂は「ヌースの保持」という魂・こころのあり方に伴うものである。それと同じ意味で、プラトンが不純の快樂について、その快樂（現われ）に「何ら健全なものはなく」それは「一種のまやかし」である (584A9-10) と言うときも、その快樂（現われ）そのものにまやかしが内在しているわけではなく、まやかしはその快樂を感じ喜んでいる「ヌースなき魂」のあり方すなわち「転変するドクサ」(508D8-9)にある⁸²。さらにこの魂における「ヌースの保持」は、ヌースによる魂全体の統治・統一を象徴する。魂の理知的で学びを愛する部分の指導にしたがい魂全体に内部分裂がない場合、他の事柄とともに快樂についても各部分は自己本来の、最もすぐれた、そして可能な限り最も真実な快樂を得ることができる (586D-587A)。このように「ヌースの保持」は高度な哲学的認識をになうとともに、魂全体のあり方（おそらく）必然的に決定する。そしてそこには純粋真実な快樂と可能な限りこれに似ようとするその他の身体的快樂が追隨する⁸³。

結 語

Butlerの言う the Natural reading は支持されてしかるべきである。第一証明は第八巻から第九巻までの国制と人間（魂）の類型論を直接受けて、両者の対応関係を軸に最も正しい人の生と最も不正な人の生との幸不幸を判定する。第二・第三証明はともに魂の三区分説を土台にしながら、すでに一度は幸不幸の判定を受けた同じ人たちを、とくに快樂の真偽という快樂のあり方に着目しながら、あらためて判定を突きつけるわけである。したがって、三つの証明が同じこと（正しい人の生は不正な人の生より幸福であるということ）を証明し、そのさい快樂のあり方をプラトンが問題にせざるをえなかったということは、幸福そして不幸の問題に快樂の問題を欠かすことはできないとプラトンが考えていた証拠である。しかし、プラトンは快樂が幸福の前提条件になると考えて

いたわけではない。正しい人には純粋な快樂その他の快樂が必然的に追隨し幸福であるのに対して、不正な人は快樂を追求すればするほどますます不幸になるということである。^{4c}

「ヌースの保持」を実現すべくこれを願い求め、これをうながすのは何によるのだろうか。プラトンの言え「善」とこれへの希求であろうか。否、そのまえに、魂の配慮を勧告し吟味をほどこす洞窟への帰還者を必要とするのであろうか。

注

【国家】のテキストは原則としてOxford Classical Text (Burnet ed.,1902) によるが、原文の読み方や写本のテキスト採用など、藤沢令夫訳『国家』（岩波文庫 1979）に準じている。また【国家】からの引用文（訳文）や訳語も同訳を基本的に使用させていただいたが、論述の都合上、直訳体に改めたり別の訳語を試みたりした箇所がある。訳者に感謝申し上げますとともに、ご寛恕を乞う次第である。

- (1) プラトンはこの第三証明のなかで「偽りの」(pseudes) という形容詞を使用していないが、慣例に従う。
- (2) たとえば、(この快樂の真偽論は)「不必要で、たしかに不首尾の、驚くべき展開を示している。その有効性は疑わしい。・・・哲学者は彼が好色家よりも質の高い生を楽しんでいると主張しうるのであろうが、その生をより多く楽しんでいると主張することはできない。楽しみはたんに個人の好みの問題であるから」。Guthrie, W.K.C., *A History of Greek Philosophy*, Vol.IV, Cambridge,1975,p.541.その他に、Annas,J., *An Introduction to Plato's Republic*, New York,1981,pp.306-314;Cross,R.C. and Woosley,A.D., *Plato's Republic: A Philosophical Commentary*, London,1964,pp.266-9;Murphy,N.R., *The Interpretation of Plato's Republic*, Oxford,1951,pp.87-96.など。
- (3) Guthrie,p.541. cf. Annas, pp.306-7.
- (4) Kraut,R., 'The Defense of Justice in Plato's *Republic*', in Kraut,R.,ed., *The Cambridge Companion to Plato*, Cambridge,Cambridge U.P.,pp.312-4.
- (5) Butler,J., 'The Arguments for the Most Pleasant Life in *Republic IX* :A Note Against the Common Interpretation', *Apeiron*, 32,1999,pp.37-48.
- (6) Kraut (p.314) は「もっとも重要な勝負で投げ倒される」は、正しい人の生が不正な人の生より729倍快いというプラトンの(おそらくおどけた)計算をさす、と説

明する。しかしそれでは Butler が言うとおりに、第三証明全体をおどけたものにとらなくてはならなくなる。

- (7) この点については拙稿「『強者の利益』プラトン『国家』第一巻におけるトラシュマコス説とその背後にある思潮」（『法政大学文学部紀要』第42号（1996年度号）1997年3月）参照。
- (8) 「ピレボス」（31B-53D）では、混合的（＝不純の）快樂と純粋な快樂の詳細な分析と考察がなされる。
- (9) White, N.P., *A Companion to Plato's Republic*, Oxford, 1979.
- (10) *A Greek-English Lexicon*, Oxford [LSJ] の 'noos' の項 I, 2, a, b 参照。
- (11) 松永雄二「知と不知」（東京大学出版会 1993）第十章「たましい・こころというものの存在」は『国家』における「ヌースをもつ」ことの意義に言及しており、小論にとっても有益である。
- (12) 第九巻の快樂論に対する誤解や無理解が散見されるのも、快樂の対象（快樂を引き起こすと考えられるもの）に関心が向きがちだからであろう。cf. White の見解 W3。
- (13) プラトンは純粋の快樂と不純の快樂との関係を後者は前者の影（eidolois tes alet-hous hedones 586B8）と呼ぶ。
- (14) 「ヌースをもつ人」に追隨する快樂がありそれを享受するとき、これを「快樂主義」と呼ぶべきかどうか疑問である。むしろソクラテス・プラトンの場合、快苦は人間の生の前提条件となっていると考える方が適切であろう。なお、第三証明が不正な人を「投げ倒す」もののなかで最大で決定的と言われた理由は、『国家』におけるトラシュマコスの通俗的快樂主義を含意する立場が、もっとも正しい人のもっとも真実純粋な快樂によって凌駕されること、いわば「お株を奪う」という皮肉な事態を指すとも考えられる。